

北海道産馬鈴しょの安定供給に関する検討会（第4回）の概要

1 日 時 平成26年5月15日（木）13：30～15：30

2 場 所 北海道第二水産ビル 4F会議室

3 出席者 別添出席者名簿のとおり

4 挨拶 道農政部生産振興局農産振興課長より挨拶

5 議 題

（1）北海道産馬鈴しょの安定供給に関する検討会設置要領の改正について

資料1に基づき事務局から説明。

（2）ジャガイモシストセンチュウ抵抗性品種の普及拡大に向けた取組状況について

資料2に基づき事務局から説明。

（3）意見交換

別添のとおり

出席者名簿

<生産者団体>

氏名	所属・役職等
鈴木 昭寿	北海道農業協同組合中央会 畑作農業課 主幹
藤井 正樹	ホクレン農業協同組合連合会 種苗課 課長
河原 憲生	ホクレン農業協同組合連合会 玉ねぎ馬鈴しょ課 課長補佐 ※ 高橋 克典玉ねぎ馬鈴しょ課課長の代理出席
山本 淳一	ホクレン農業協同組合連合会 でん粉課 課長
上田 裕之	十勝農業協同組合連合会 農産課 課長
藤谷 哲雄	上川生産農業協同組合連合会 農業振興部 次長
田中 政伸	士幌町農業協同組合 農産部農産課 主任 ※ 仲野 貴之農産課課長の代理出席
須藤 昌彦	芽室町農業協同組合 農畜産部 次長
石崎 克典	ようてい農業協同組合 営農購買事業本部 営農推進課 課長
小野 丈夫	斜里町農業協同組合 営農部 部長
上野 隆	小清水町農業協同組合 営農部 部長

<試験研究機関>

大波 正寿	地方独立行政法人北海道立総合研究機構 農業研究本部 北見農業試験場 主査（馬鈴しょ）
川口 武泰	ホクレン農業協同組合連合会 農業総合研究所 作物生産研究室 畑作物開発課 課長

<関連団体・企業>

三澤 孝	独立行政法人種苗管理センター 北海道中央農場 場長
三浦 義徳	公益財団法人日本特産農作物種苗協会 十勝特産種苗センター 場長
近藤 和仁	日本スナック・シリアルフーズ協会 カルビー株式会社 管理本部 馬鈴薯調達課 課長 ※ 植村 弘之カルビーポテト株式会社 馬鈴薯研究所所長の代理出席
久郷 真司	サンマルコ食品株式会社 商品部 次長
小山 雅裕	公益社団法人北海道馬鈴しょ生産安定基金協会 事務局長

<行政>

関 俊一	北海道農政部生産振興局技術普及課 主幹（普及調整）
得地 秀幸	北海道農政部生産振興局技術普及課 主幹（研究連携）
石川 卓治	北海道農政部生産振興局技術普及課 主査（普及指導）
白旗 哲史	北海道農政部生産振興局農産振興課 課長
月岡 直明	北海道農政部生産振興局農産振興課 主幹（畑作企画）
山根 敏史	北海道農政部生産振興局農産振興課 主査（てん菜馬鈴しょ）

<オブザーバー>

三浦 保	農林水産省北海道農政事務所 農政推進課 課長補佐
------	--------------------------

北海道産馬鈴しょの安定供給に関する検討会（第4回）の意見交換概要

- 1 日 時 平成26年5月15日（木）13:30～15:30
- 2 場 所 北海道第二水産ビル 4F会議室
- 3 意見交換（主な発言内容）

【モデル地区における抵抗性品種の普及拡大に向けた検討状況等】

- 生産者団体
 - ・ 当地域では、主力の男爵薯にキタアカリ、とうやを導入してきた。今後きたかむいを増やす計画。
 - ・ 面積を増やして売りにつながるかというところではないので、適正面積、販売につながる面積としていく。また、営農面では生産者個々に応じた品種選択を指導していく。
 - ・ 販売面では、きたかむいは越冬後に売る商材であるという特性をまず知ってもらうという地道な取組を続けていく。

- 生産者団体
 - ・ 24年度に本検討会が3回開催された後、地区での会議開催が遅かった。本検討会で議論された内容が地域にどの程度浸透しているか疑問を感じている。
 - ・ 抵抗性品種の拡大が必要であるという認識を共有したということは成果ではあるが、実際面においては物足りないというのが感想。全道に濃淡なく波及するようにとの意見を述べてきたが、地域によっては伝わっていないという状況もある。

- 生産者団体
 - ・ この会議が始まったおかげで品種開発が早くなったと感じている。品種開発の情報が早めに共有されることによって、生産者に早めに宣伝できている。でん粉用の有望品種が3品種出てきそうだというのはいずれも明るい材料。
 - ・ コナユキについては、地域によって安定性に欠けるという印象。

- 生産者団体
 - ・ 当地域においては、加工用のチップ用については、きたひめ、オホーツクチップを中心に普及が進んでいる。フレンチフライ用については、抵抗性のないホッカイコガネを使っているが、まだ品種になっていない勝系34号の現地試験ほを設置。生食用の抵抗性品種については、ひかるに力を入れている。
 - ・ 生食用品種は全般に着粒数が少ない品種が多く種の増殖が進みづらい。昨年ジベレリン（植物ホルモン）の試験ほを設置し、着粒数が増えているという感触を持っている。
 - ・ 要望として、品種の特性をつかむため、系統段階から地域適応性試験を行いたい。

○ 生産者団体

- ・ 当地域では抵抗性品種の割合は 10%台で全道の平均から見ても低い。マークイン、トヨシロが主体となっておりこれらに取って換わる品種が出てこないが進まない。
- ・ でん粉用については良い品種が出てくればすぐにでも換わる可能性が高い。
- ・ 生食用としてはとうやを作付けしており面積が年々増加傾向。要因は、生産者側としては早生であること、また、関東近在でも作られたことにより品種の知名度が上がり、市場からの評価も高まったこと。このことは作付拡大の一つのヒントになるのでは。

【地域における抵抗性品種の普及拡大に向けた検討状況等】

○ 生産者団体

- ・ 当地域においてはチップ用でオホーツクチップが伸びてきている。生食用ではキタアカリ、とうやに加え、きたかむいが少し増えてきている。生食用についてはパイプを太くしていかないと流通販売が進展しない。
- ・ でん原用品種については、わずかな面積ではあるが、良い系統の種子生産体制が整い次第全面置き換えを考えている。

○ 生産者団体

- ・ 当地域においては抵抗性品種の割合は 10 数%。でん粉用の普及率はほぼ 0 だが、工場が受け入れてくれる品種であれば置き換わる。北育 20 号、HP07、北海 105 号の現地試験を実施しているところ。
- ・ 今年一部の地域から加工用のきたひめが足りないという話があった。計画生産していない種を春になってから突然欲しいと言われても対応できない。どの地域がどのような馬鈴しょの生産を考えていて、そのための種子の供給体制はどのように考えているのかということを一度、公の機関が公平な立場で調査し資料化することが必要なのではないかと。

【既存及び新たな有望品種に関する早期の情報提供・共有】

○ 試験研究機関

- ・ でん粉用については、コナユキが数年前に出て現場に広まってきているが苦戦している。
- ・ 北育 20 号が今年優良品種になった。また、HP07 が今年地域在来品種となり、増殖が開始された。北海 20 号、HP07、北海 105 号とも収量がコナフブキを上回るだろうという見込。地域によってどれがベストかは検討が必要だが、この 3 品種でコナフブキにほぼ置き換わるだろう。
- ・ 順調に増殖したとして、生産現場に入るのが平成 29 年。数千～1 万 ha になるにはさらに 3～4 年かかる。ジャガイモシストセンチュウ抵抗性品種の普及について、目標とする平成 34 年には、100%に到達するか、その直前の段階と考えている。

○ 流通団体・企業

- ・ 種苗管理センター、各試験場、農協連、産地等と協議しシミュレーションした数字を基に組み立てを行って、平成 34 年にでん原用 100%がようやくかと考えている。

- ・ コナフブキでも一般ほに出してから広く普及するまでに7年程度かかっている。育成中の新品種の普及に向けては、一般栽培開始前に各地で各種の試験を行い、早めに情報を共有することが重要と考えている。
- ・ 現在育成中の有望3品種が一般ほに下りてくるまで、あと3~4年は現行の品種体制の中でやっ
ていかなければいけないという途中経過の課題も残っている。
- ・ J Aグループのプロジェクトとして、でん原用品種を平成34年に抵抗性品種100%に置き換え
という目標をかかげ、道庁も同じ目標、それから馬鈴しょ全体で50%という目標をこの検討会でか
かげ、結果、国も10年後までに新しい品種の作付けを50%にしましょうと言っている中では、新
しい品種へ移行するスピードを早めることと同時に生産体制、生産に関わる環境の維持も重要。
25年度の状況は道内においても各地域で温度差があると聞いているが、道庁に強いリーダーシッ
プを持ってリードしていただきたい。

○ 北海道

- ・ 生産者団体から話のあった「生食用についてはパイプを太くしていかないと流通販売が進展しな
い」というのは、ロットをそろえてということか。

○ 生産者団体

- ・ 当地域にはるか、きたかむいに認識を置いて動いている農協があるが、これら一冬越してから甘
みが出てくるという品種は、非常に売りづらいのだろうと思う。最近、ホクレンで「よくねたい
も」という売り方をしているが、2品種ともこのような売り方をしないといけないのだろう。

【消費拡大活動の実施】

○ 流通団体・企業

- ・ 生食用の消費量がここ20年で25%程度落ちており、いものマーケットが縮小していることに対
する危機感を覚え、一昨年「じゃがいも問題研究所」を立ち上げ2年経過。生食用馬鈴しょの消費
を増やすこと、品種の認知を高めるという取り組みをしている。
- ・ 品種フェアを道外の量販店において実施し、少しずつではあるが着実に品種の認知度は上がって
きている。
- ・ 消費者は、おいしいものを食べたいということで、春先に糖度がのる「きたかむい」を選択する
というお客さんもいれば、皮が剥きやすいということでスノーマーチを選択するお客さんもいる。
- ・ 青果市場、スーパーの思いはまた別。大阪ではメイクインとじゃがいもという売り方。関東では、
男爵薯、キタアカリ、メイクイン、とうやなど。消費者のニーズと流通関係が求めることが異な
ることが課題。
- ・ 北海道の各地域それぞれに適合した品種をどのように束ねていくか。束ねていくということをし
なければ、何を売り込んでいけばいいのかわからないまま時間だけが過ぎていくということが今
後予想される。
- ・ この検討会が意見交換で終わってしまうと、生食用の切り換えはなかなか進まないように感じる。

- ・ 全道の普及率の目標を設定するのは正しいと思うが、現実には流通面の問題もあるので、数字先行で進んでいくのは危険。掛け声倒れにならないよう、この検討会の中でしっかり施策を組み立てていく必要がある。
- 北海道
 - ・ 品種の集約については、品種の多様性とブランドとしてのロットとは裏腹な関係。慎重に一つずつ進めていきたい。
- 加工団体・企業
 - ・ 北海道の男爵薯を原料に冷凍コロッケを製造し全国に販売。産地、品種に限定を加えている当社が特異的で、他社は国産の馬鈴しょというところが多い。
 - ・ 昨年からきたかむいを使ったコロッケを一部販売している。きたかむいは使える時期が年明け～5月頃となる。年間通して生いもを使ってコロッケを製造販売しているため、時期が限られる品種は使いづらい。
 - ・ アンケートの反応では非常に評価されており、全国のバイヤーにも試食してもらおうと反応は良い。しかし取引の話が秋口に来たりすると、その時期はきたかむいの適期ではないという状況。
- 加工団体・企業
 - ・ 東京では、一般の人たちは品種に関係なく買う人が多いと思われる。品種がいっぱいあると消費者は買う時に困ってしまうのではないかなという印象。
 - ・ ポテトチップスについては品種をうたって販売することはめったにないため、カラー、比重、食味の面で良い品種があれば抵抗性品種でもそうでなくても使える。
 - ・ 当社のスナック菓子にはでん粉用に分類されるコナフブキを少し使っている商品がある。抵抗性のあるでん粉用品種で合うものがあればこの商品に使える可能性がある。
- 北海道
 - ・ 検討会としてパンフレットを活用（配布）するイベント等のアイデアがあればお聞かせいただきたい。
- 流通団体・企業
 - ・ 活用場面はあるとは思っている。品種の特長、作り手の思い等がまとめられている。パンフレットにレシピが載せられているが、中食外食関係であれば可能性はあるが、一般の消費者はここまで手の込んだものは作らないのでは。
- 生産者団体
 - ・ 東京では男爵薯とキタアカリ、大阪ではマークイン以外は丸いものと総称されてしまう。
 - ・ キタアカリが出てきた時に、万能の男爵薯との違いとしてキタアカリの食感を紹介。
 - ・ パンフレットで言えるのは目の感覚。お客さんには舌の感覚が重要。キタアカリの特長である火のとおりが早いという点を、料理をする際のアドバイスとして添えると反応が良かった。

- ・ 男爵薯の減少は生産者の所得につながらないことが一因。抵抗性品種については知名度が上がらず所得につながらない。これらが要因となって作付面積が減少しているのではないか。
- ・ 食育の観点からも、包丁がなくても簡単に作れるレシピを広めていくということが販売につながるのではないかと思う。

【今後の研究開発の方向性】

○ 試験研究機関

- ・ でん粉原料用の新品種H P07 について、先日品種登録の出願をしたところ。今年独自に地域適応性試験を実施中。実用性が本当にあるのかどうかという見極めが進んでいくだろうと考えている。
- ・ 生食用のきたかむいについて、食感の粘質性が普及の妨げの一因となっていると考えている。粉をふくものを作っていきたいと考えているがなかなか難しい。

○ 流通団体・企業

- ・ 資料 2-3 の種子用面積 5,296ha の中には、道内消費分とともに移出用として 9 百数十 ha 分含まれている。
- ・ キタアカリの需要が年々府県で伸びてきた。それに伴い知名度が上がってきた。ホームセンター等においては、棚によっては男爵薯よりもキタアカリの方が売れるという方向に変わってきている。
- ・ 府県に種いもを販売することは、競合産地を増やす、馬鈴しょの販売を阻害するという面もあるが、知名度を上げる、品種の特性を理解いただくという面では、ある意味消費拡大の一つのツールという見方をしている。
- ・ 移出用においても抵抗性品種の割合は 20%前後であるが、府県に向けてサンプル的な販売を行いながら少しずつ置き換えを図っていきたい。
- ・ 今後は、種いもの生産現場で役立つ技術にも力を入れていきたい。種苗生産をして種苗普及をしていくという大きな役割を果たすため、体制を強化した中で進めていく。

○ 関係機関

- ・ 資料 2 p 3 に品種開発体制の強化に関して国へ提案とあるが、平成 22 年に指定試験事業が廃止され競争的資金制度になって、26 年度から育種対応型が新設されたということは、育種の初期世代、従来国の対象外であった部分に光が当たってきたという認識で良いか。

○ 試験研究機関

- ・ 国の事業は、品種が出る直前の時期の支援。育種の初期世代の研究費については対象外であるため、北海道からの交付金や関係機関からの支援による。

【その他】

○ 関係機関

- ・ 原原種の需要見込をいかに把握するか、できるだけ早く情報をいただけると助かる。需要が伸びる品種もそうだが減っていく品種の動向も把握したい。

○ 関係機関

- ・ 普及するあるいは普及しないという部分を我々の段階でもっと詰めるべき。
- ・ 経営を優先してどの地域でも同じ品種を作っているが、道内の中でも暖かい地方向き、寒い地方向きといった栽培適地という点から地域の割当なりをどう考えるか。

○ 関係機関

- ・ 農水省では昨年、新品種・新技術の開発・保護・普及の方針を取りまとめ、馬鈴しょについては抵抗性品種を広めていく目標等を示したところ。
- ・ 今年は、食料・農業・農村基本計画の見直し年ということで、今後10年程度の品目ごとの生産数量目標等も明らかにしていくものと思われるので、注視していただきたい。

○ 関係機関

- ・ 当機関ではでん粉原料用を中心に病害虫対策、生産技術対策を含めて公募事業を実施し、抵抗性品種の育種に寄与できればと考えている。
- ・ 種子の増産をどうするかということをもっと検討すべきではないかと考える。

○ 北海道

- ・ 全体を通じて発言、要望、指摘等あればお願いしたい。
- ・ 今後についてであるが、来年度もこの時期に開催するということによろしいか。
- ・ 特に意見がないようなので、その方向で進めさせていただきたい。
- ・ これをもって検討会を閉会させていただく。円滑な議事進行にご協力いただき感謝。